

平成27年度病虫害発生予報 第4号（7月予報）

平成27年7月1日
青森県病虫害防除所

【概要】

- 水 稲：葉いもち及び稲こうじ病は平年並と予想される。コバネイナゴは平年並、アカヒゲホソミドリカスミカメ及びフタオビコヤガはやや多いと予想される。
- りんご：斑点落葉病は少ないと予想される。リンゴコカクモンハマキ及びモモシンクイガは平年並、リンゴハダニは津軽地域でやや少なく、県南地域で少ない、ナミハダニは多いと予想される。
- 特産果樹：ぶどうの晩腐病及び褐斑病は多いと予想される。おうとうの灰星病は少ないと予想される。
- 野菜：じゃがいもの疫病はやや少ないと予想される。ねぎのさび病はやや多い、斑点性病害及びべと病は平年並、ネギコガはやや多い、ネギハモグリバエ及びネギアザミウマは多いと予想される。アブラナ科野菜のコナガは平年並、ヨトウガはやや少ないと予想される。ながいものナガイモコガは平年並と予想される。野菜共通でアブラムシ類はやや多い、オオタバコガは多いと予想される。
- その他作物：牧草、小麦等イネ科植物のアワヨトウは少ないと予想される。

1 予報内容

(1) 水 稲

病虫害名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
葉いもち	県内全域	平年並 (初発平年： 7月上旬)	平年並	①6月末現在、本田での発生は認められていない(±)。 ②向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
稲こうじ病	県内全域	—	平年並	①前年の発生量は平年並であった(±)。 ②向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
コバネイナゴ	県内全域	やや早い (ふ化盛期)	平年並	①予察水田の畦畔におけるふ化幼虫の発生始期は平年よりやや早く推移している。 ②前年の発生量は平年並であった(±)。 ③向こう1か月の気温はほぼ平年並と予想される(±)。
斑点米カメムシ類 (アカヒゲホソミドリカスミカメ)	県内全域	早い (第1世代成虫)	やや多い	①越冬世代成虫の発生時期は平年より早く、発生量は平年よりやや多く推移している(+) ②向こう1か月の気温はほぼ平年並と予想される(±)。
フタオビコヤガ	県内全域	やや早い (第1世代成虫)	やや多い	①有効積算温度から推定される第1世代成虫の発生盛期は平年よりやや早い。 ②6月下旬の巡回調査において幼虫食害が平年よりやや多く認められている(+) ③向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並と予想される(±)。

(2) りんご

病害虫名	予報内容			予報の根拠
	発生地域	発生時期	発生量	
斑点落葉病	県内全域	—	少ない	①6月の発生量は平年より少ない(－)。 ②向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
リンゴコカクモンハマキ	県内全域	早い (第1世代 ふ化最盛期)	平年並	①フェロモントラップへの誘殺時期は平年より早い。 ②向こう1か月の気温はほぼ平年並と予想される(±)。 ③6月の発生量は平年並である(±)。
モモシンクイガ	県内全域	—	平年並	①前年の発生量は平年並であった(±)。 ②向こう1か月の気温はほぼ平年並と予想される(±)。
リンゴハダニ	津軽地域	平年並 (増加期)	やや少ない	①向こう1か月の気温はほぼ平年並と予想される(±)。 ②6月の発生量は津軽地域で平年よりやや少なく(－)、県南地域で少ない(－)。
	県南地域		少ない	
ナミハダニ	県内全域	平年並 (増加期)	多い	①向こう1か月の気温はほぼ平年並と予想される(±)。 ②6月の発生量は平年より多い(+)

(3) 特産果樹

病害虫名	予報内容			予報の根拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(ぶどう) 晩腐病	県内全域	平年並	多い	①向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並と予想される(±)。 ②前年の発生量は平年より多かった(+)
(ぶどう) 褐斑病(キャンベル・アーリー)	県南地域	平年並	多い	①向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並と予想される(±)。 ②前年の発生量は平年より多かった(+)
(おうとう) 灰星病(実腐れ)	県内全域	—	少ない	①6月の実腐れ(佐藤錦)の発生量は平年より少ない(－)。 ②向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並と予想される(±)。

(4) 野 菜

病虫害名	予 報 内 容			予 報 の 根 拠
	発生地域	発生時期	発生量	
(じゃがいも) 疫 病	県内全域	—	やや少ない	①6月下旬の発生量は平年より少ない(—)。 ②向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
(ね ぎ) さび病	県内全域	—	やや多い	①6月下旬の発生量は津軽地域で平年よりやや多く(+)、県南地域で平年並(±)である。 ②向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
(ね ぎ) 斑点性病害 (黒斑病・葉枯病)	県内全域	—	平年並	①6月下旬の発生量は平年よりやや少ない(—)。 ②向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
(ね ぎ) べと病	県内全域	—	平年並	①6月下旬の発生量は平年よりやや少ない(—)。 ②向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
(ね ぎ) ネギコガ	県内全域	早い (幼虫食害)	やや多い	①6月の誘殺数は平年より多い(+) ②6月下旬の幼虫食害は津軽地域で平年並(±)、 県南地域で平年よりやや多い(+) ③向こう1か月の気温はほぼ平年並と予想される(±)。
(ね ぎ) ネギハモグリバエ	県内全域	—	多い	①6月下旬の発生量は平年より多い(+) ②向こう1か月の気温はほぼ平年並と予想される(±)。
(ね ぎ) ネギアザミウマ	県内地域	—	多い	①6月下旬の発生量は平年より多い(+) ②向こう1か月の気温及び降水量はほぼ平年並と予想される(±)。
(アブラナ科野菜) コナガ	県内全域	平年並 (次世代成虫)	平年並 (次世代幼虫)	①次世代成虫の発生盛期は平年並の7月下旬と予想される。 ②6月中旬の幼虫発生量は平年並(±)である。 ③向こう1か月の気温はほぼ平年並と予想される(±)。
(アブラナ科野菜) ヨトウガ	県内地域	平年並 (次世代成虫)	やや少ない	①次世代成虫の発生盛期は平年並の7月下旬と予想される。 ②6月中旬の卵塊・幼虫の発生量は平年より少ない(—)。 ③向こう1か月の気温はほぼ平年並と予想される(±)。
(ながいも) ナガイモコガ	県内全域	平年並 (次世代成虫)	平年並	①次世代成虫の発生盛期は平年並の7月上中旬と予想される。 ②越冬世代成虫の誘殺数は平年並(±)である。 ③向こう1か月の気温はほぼ平年並と予想される(±)。
(野菜共通) アブラムシ類	県内全域	—	やや多い	①6月下旬の発生量は平年よりやや多い(+) ②向こう1か月の気温はほぼ平年並と予想される(±)。
(野菜共通) オオタバコガ	県内全域	平年並 (次世代成虫)	多い	①6月の誘殺数は平年より多い(+) ②向こう1か月の気温はほぼ平年並(±)、次世代成虫の発生盛期は平年並の7月下旬と予想される。

- ② 茎葉散布を予定している場合は、出穂直前と穂揃期の2回散布し、散布間隔は7日程度とする。なお、出穂直前とは走り穂が見えた時期、穂揃期とは80%の穂が出穂した時期をいう。
- ③ 出穂が長引いた場合、穂揃期に達しなくても出穂直前散布7日目頃に薬剤を散布する。
- ④ 抵抗性の弱い品種で葉いもちが見られる場合や、葉いもちの発生が多いなど穂いもちの多発生が予想される場合には、穂揃5～7日後にも薬剤散布を行う。

〔耐性菌対策〕

- ア 同一系統成分薬剤を連続使用すると耐性菌が発達しやすくなる。以下の薬剤は最大でそれぞれ年1回の使用に止める。
 - ・デラウス剤、アチーブ剤は同一薬剤とみなす。
 - ・嵐剤、オリブライト剤、イモチミン剤、アミスター剤は同一薬剤とみなす。
 - ・キタジンP剤、フジワン剤は同一薬剤とみなす。
- イ これらの成分を含む本田散布剤は、葉いもちに使用する場合は初発前あるいは発生初期に、穂いもちの場合は薬剤の使用適期に散布する。ただし、多発時にはこれら以外の別系統の薬剤に切り替える。
- ウ 種子流通に伴い耐性菌が広範囲に伝播することがあるため、採種ほではこれらの成分を含む薬剤は使用しない。また、採種ほの周辺ほ場では使用を控える。
- エ 使用方法に記載された使用量を厳守する。

【 稲こうじ病 】

- ① 窒素施肥量が多いと発生が多くなる傾向があるので、適正な施肥管理を行う。
- ② 稲こうじ病は、出穂後の籾に病徴を現すが、防除適期は穂ばらみ期で、出穂20～10日前に薬剤を散布する。
- ③ 穂ばらみ期の低温、日照不足、多雨で発生が多くなるので、このような気象条件で前年に発生が見られた水田では必ず防除する。
- ④ 「つがるロマン」と「まっしぐら」では、「まっしぐら」の方が発病しやすいので注意する。

【 斑点米カメムシ類 】

- ① 斑点米カメムシ類の生息密度を低下させるためには、発生源となる雑草の刈り取りが重要であり、7月の草刈りは第1世代幼虫の防除に有効である。草刈りは7月中旬までに雑草が開花・結実しないように行い、遅くとも水稻の出穂2週間前までに終える。
- ② イネの出穂間際の草刈りは逆に水田内に追い立てることになるので注意する。やむをえずイネ出穂後に畦畔等の草刈りを行う場合は、草刈場所周辺の水田において、ネオニコチノイド系またはフェニルピラゾール系殺虫剤散布直前から1週間以内を目途に行う。また、合成ピレスロイド系及び有機リン系殺虫剤の場合は、1回目の散布後すみやかに行う。ただし、あらかじめ草刈り予定の場所に殺虫剤を散布した場合は草刈りしても問題ない。
- ③ ノビエ、ホタルイ・シズイが多発生している水田では、斑点米カメムシ類が誘引されるので、除草を徹底する。

【 コバネイナゴ 】

- ① 7月第3～5半旬のふ化終期に、畦畔付近に幼虫が多くみられる場合は、畦畔(農道、水路の雑草地も含む)及び水田の畦畔際2～3mに薬剤を散布する。

【 その他の病害虫 】

- ① ばか苗病は徒長あるいは枯死した罹病株を見つけ次第抜取り、土中に埋めるなど適切に処分をして、出穂後の籾への感染を防止する。
- ② フタオビコヤガ、イネドロオイムシの食害が目立ち、幼虫が見られる水田では7月上旬に薬剤を散布する。
- ③ ニカメイガの被害株率が4%を超えるような発生事例はなく、本種単独の防除が必要となる水田は少ない。
- ④ 長距離移動性害虫であるセジロウンカ、コブノメイガの飛来時期は、例年7月上旬以降となる。今のところ発生時期、発生量の予測はできないが、今後、発表される予察情報に注意し適期防除に努める。

★農薬散布後の「止水期間は7日間」です★

水田で除草剤や水面施用剤などの農薬を使用した時には、河川に流れ出ないように散布後7日間は落水・かけ流しをしない。その間の入水は水尻を止めたままで行う。

(3) りんご

【斑点落葉病】

- ① 急増が懸念される場合は、ユニックス顆粒水和剤47の1,500倍又はポリオキシシリンAL水和剤1,000倍も使用する。なお、「7月半ば」又は「7月末」にユニックス顆粒水和剤47を使用する場合は、この時期の褐斑病防除の強化対策は必要ない。
- ② ポリオキシシリンAL水和剤は薬剤耐性の懸念があるので、連続散布を避け、「7月半ば」まではできるだけ使用しない。

【リンゴコカクモンハマキ】

- ① 発生の多い園地では、フェロモントラップを利用して適期にサムコルフロアブル10、フェニックスフロアブル又はディアナWDGを散布する。

【クワコナカイガラムシ】

- ① 7月中旬まで成虫が大枝の切口や木の空洞部周辺に集まるのでブラシなどでつぶす。
- ② バンド巻きによる誘殺を実施している場合は、第1世代卵のふ化前（7月中旬）に必ず除去する。
- ③ 第1世代幼虫については、バンド巻きの産卵消長から移動時期を予測し、移動初発日及びその約10日後の2回、防除剤による胴木洗いを手散布で実施する。

【モモシクイガ】

- ① 無袋栽培では毎回防除剤を使用する。
- ② 「7月初め」の防除剤にはピレスロイド剤を使用する。前年にモモシクイガの被害がなく、周辺に放任園など発生源の見られない園地で、「7月初め」のピレスロイド剤として、食入防止期間の長いバリスロイドEW、サイハロン水和剤、イカズチWDGのいずれかを使用した場合は、次の「7月半ば」のモモシクイガ防除剤を省略できる。

【ハダニ類】

- ① ひこばえ（根ばや）と大枝から発出している徒長枝は早めに剪除する。
- ② 薬剤の選択に当たっては、発生しているハダニの種類を確認するとともに、散布園における薬剤抵抗性に注意する。
- ③ 殺ダニ剤は薬剤抵抗性が出やすいので、同一薬剤は年1回の使用とする。
- ④ オマイト水和剤は7月下旬までの使用を避ける。

(4) 特産果樹

○ ぶどう

【晩腐病】

- ① 「キャンベル・アーリー」及び「スチューベン」では、「大豆粒大」にジマンダイセン水和剤、「7月中旬」にはアミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブル、ホライズンドライフロアブルのいずれかを散布する。
- ② 「スチューベン」で発生の多い園地では、「小豆粒大」にベンレート水和剤3,000倍を特別散布する。
- ③ ジマンダイセン水和剤は散布時期が遅れると果面汚染の懸念があるので、「大豆粒大」までに散布する。
- ④ ストロビルリン単剤のアミスター10フロアブルとストロビードライフロアブル及び同じ系統の混合剤であるホライズンドライフロアブルは、薬剤耐性の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。

【褐斑病】

- ① 「キャンベル・アーリー」、「ナイアガラ」などが発生しやすい。
- ② 「キャンベル・アーリー」では、「大豆粒大」にジマンダイセン水和剤、「7月中旬」にアミスター10フロアブル、ストロビードライフロアブル、ホライズンドライフロアブルのいずれかを散布する。

○ おうとう

【灰星病】

- ① 「南陽」や「サミット」などの晩生種では、収穫前にアミスター10フロアブル1,000倍又はナリアWDG2,000倍を特別散布する。
- ② ストロビルリン単剤のアミスター10フロアブル及び同じ系統の混合剤であるナリアWDGは、薬剤耐性の懸念があるので、合わせて年2回以内の使用とする。

【 ハダニ類 】

- ① 発生が多い園地では、収穫後に殺ダニ剤を使用する。

○ 西洋なし

【 カメムシ類 】

- ① 8月上旬まで断続的に成虫が飛来し、葉に産卵するので、卵塊を見つけ次第、つぶして処分する。ふ化幼虫がみられたら、分散する前に捕殺する。
- ② 発生がみられた場合は、MR. ジョーカー水和剤2,000倍を特別散布する。
なお、「7月中旬」に発生がみられたときは、テルスター水和剤1,000倍を選択するか、スカウトフロアブルを1,500倍で使用する。また、「7月下旬」から「8月上旬」に発生がみられたときは、スカウトフロアブルを1,500倍で使用する。

(5) 野 菜

○ アブラナ科野菜

【 コナガ・ヨトウガ 】

- ① 生育初期に発生すると被害が大きいため、定植時の薬剤防除を徹底する。
- ② 老齢幼虫になると薬剤効果が劣るので、若中齢幼虫のうちに防除する。
- ③ 殺虫剤に対する抵抗性が発現しやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。
- ④ 同一時期に発生加害するモンシロチョウ及びウワバ類などの幼虫防除を考慮して、効率的な薬剤を選択する。

○ ね ぎ

【 さび病 】

- ① 夏期に低温多湿が続くと多発する傾向がある。
- ② 多発してからの薬剤散布は効果が劣るため、発生が少ないうちから定期的に防除を実施する。

【 斑点性病害（黒斑病・葉枯病） 】

- ① 降雨が多く、多湿な条件が続くと発生が多くなる。
- ② 肥料切れや生育後期に草勢が衰えると多発しやすくなるので、適切な肥培管理に努める。
- ③ 発生が認められたら定期的に防除を実施する。
- ④ 被害茎葉は伝染源となるので処分する。

【 ベと病 】

- ① 平均気温15～20℃とやや冷涼で降雨が続くと発生しやすい。
- ② 連作畑及び排水不良畑に作付けした場合や日陰で風通しの悪い場所で発生しやすい。
- ③ 発生が多くなってからの薬剤防除では効果が劣るため、発生初期の防除を徹底する。
- ④ 被害茎葉は伝染源となるので処分する。

【 ネギコガ 】

- ① 幼虫食入を防止する防除適期は成虫発生始期～幼虫ふ化期である。第1世代成虫の発生盛期は6月中下旬、第2世代成虫の発生盛期は7月下旬～8月上旬である。
- ② 幼虫が葉内に侵入してからでは薬剤の効果が劣ることから、成虫の発生盛期を散布適期の目安として、合成ピレスロイド剤は成虫の発生始期～盛期に、有機リン剤は成虫の発生盛期～ふ化盛期に散布する。

【 ネギハモグリバエ・ネギアザミウマ 】

- ① 高温・少雨の年に多発しやすい傾向がある。
- ② 繁殖力が旺盛であり、両種ともに約20日間で1世代を経過し、年5回以上世代を繰り返す。
- ③ 多発してからの防除では効果が期待できないので、被害葉が目立ち始めた頃から薬剤散布を7～10日間隔で連続散布すると効果的である。
- ④ 薬剤抵抗性の発達を防止するため、同一系統の薬剤は連用しない。合成ピレスロイド剤及び有機リン剤は、薬剤感受性の低下が認められていることから、防除効果の低下が懸念される場合は使用を控える。

○ ながいも

【 ナガイモコガ 】

- ① 萌芽揃～つるの伸長期に多発するとふ化幼虫が新芽や新つるを加害するため、腋芽が叢生して生育が遅れる。また、葉洗病などの病害に感染しやすくなる。
- ② 有効積算温度から予想される第1世代成虫の発生盛期は7月上中旬である。

- ③ 成虫の発生盛期を産卵～ふ化時期と考えて、ほ場内で成虫の飛翔が目立つ頃に殺虫剤を散布する。また、一回目散布の7～10日後に追加散布するとより効果的である。

○ 野菜全般

【 アブラムシ類 】

- ① 夏場を中心に発生が多く、降雨が少なく乾燥した気象で多発しやすい。
- ② 若い葉を好み葉裏に寄生し、多発すると葉が縮れ、生育が著しく停滞する。また、ウイルス病を媒介する。
- ③ 早期発見に努め、密度が高くなる前に防除する。薬液が葉裏にも十分付着するように散布する。
- ④ 殺虫剤に対する抵抗性が発現しやすいので、同一系統の薬剤を連用しない。

【 オオタバコガ 】

- ① 春の発生密度は低く、夏から秋にかけて発生密度が高くなり、青森県での年間世代数は3～4世代である。
- ② 加害作物が多岐にわたる。卵は新葉の先端や花蕾に1卵ずつ産み付け、ヨトウガ類のように卵塊を形成することはないので、ほ場をよく見回り早期発見に努める。
- ③ 幼虫は潜る性質が強く、花蕾や果実内を食入する。齢期が進むにつれ薬剤の効果が低下するので、若齢幼虫期に防除する。
- ④ 薬剤は株全体に十分付着するように散布する。薬剤抵抗性の発生を防止するため、作用性の異なる薬剤で輪番散布する。なお、有機リン剤、カーバメート剤、合成ピレスロイド剤は効果が低いので、最新の登録薬剤を準備する。
- ⑤ 施設栽培では、開口部に防虫ネット等を設置し成虫の侵入を防止する。

(5) その他作物

○ 牧草、小麦等のイネ科作物

【 アワヨトウ 】

本虫による被害は県外からの飛来量に大きく左右される。成虫の飛来は5月下旬～6月上旬に観測された。幼虫のふ化始めは6月中旬、食害盛期は7月上旬と予想される。牧草や小麦での幼虫発生に注意し、被害が認められたほ場では、以下の点に注意して防除を行う。

- ① 老齢幼虫になると防除効果が劣るので、若中齢幼虫の早期発見に努め、殺虫剤を散布する。
- ② 水稻及びスイートコーンへは直接産卵することはないが、ほ場周辺から幼虫が移動し食害するので、ほ場周辺の発生にも注意する。

★農薬を使用する際には必ず最新の農薬登録情報を確認してください★

また、短期暴露評価の導入により使用方法が変更される農薬は、登録内容の変更前であっても、変更後の使用方法で使用する必要があるため、変更の有無を次のWebサイトで確認してから使用してください。

農林水産省「農薬情報」 http://www.maff.go.jp/j/nouyaku/n_info/

(独)農林水産消費安全技術センター「農薬登録情報提供システム」

http://www.acis.famic.go.jp/index_kensaku.htm

～ 青森県農薬危害防止運動実施中！（5月1日～8月31日） ～

- 農作物や使用者の安全のため、農薬は使用基準を守って使用しよう！
- 農薬散布の際は、周辺に農薬を飛散させないようにしよう！

☆住宅地や畜舎などへの農薬の飛散防止に注意してください☆

学校、保育所、病院、公園等の公共施設、街路樹、住宅地とこれに近接する土地、森林、家庭菜園、市民農園等においては、住民や子ども等へ健康被害が生じないよう、できるだけ農薬を使用しない管理を心がけましょう。また、農薬を散布せざるを得ない場合は、飛散防止に努めて下さい。農薬を使用する際は、事前に周辺住民に対して農薬の使用に関する情報や連絡先を幅広く周知するとともに、近辺に化学物質に敏感な人が居住していることを把握している場合は、十分配慮しましょう。

クロルピクリン剤等の土壌くん蒸剤を使用する場合はラベルに表示された“使用上の注意事項”を遵守し、当該農薬の揮散防止のため、ポリエチレンフィルム等（厚さ0.03mm以上）で被覆するなどの必要な措置を講じて下さい。また、周辺の住宅地や畜舎、農作物等に影響を与えないように風向きに十分注意しましょう。

《当情報に関する問合せ先》

青森県病害虫防除所 TEL:017-729-1717 FAX:017-729-1900
〒030-0113 青森市第二問屋町4-11-6

※ 当情報は、青森県農業情報サービスネットワーク「アップル農場：病害虫防除情報」(<http://www.applenet.jp>)に掲載しています。